

最近、いわゆるアジアNIC  
S諸国の著しい経済成長と社会的活力のよってきたる源泉を学問的に追究しようとする試みがわが国内外で始まっている。本書の著者も、日本、シンガポール、香港、台湾、韓国、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）、中国などの漢字文化諸国の「独特な経済成長の活力」に着目し、これら諸国の全体像をとらえるために、それぞれの国の経済、政治、文化の三局面を社会的・

歴史的展望のなかで分析している。そのような作業の結果、著者は、「儒教の伝統とそのルネッサンス」を通じて、新しい世界としての漢字文化圏（本書の原題でもある Le nouveau Monde Sinise）が人類史の将来に「新しい文明形態」として屹立（きりりつ）するのではないか、という壮大な展望を示している。

くに社会と文化の面から見事にとらえている。

「漢字文化諸国のさまざまな文化は思惟様式の共通基盤に根を下ろしており、かつこの思惟様式の基盤こそ、西欧諸国が同一のインド・ヨーロッパ文化の基盤によって相互に近親として結ばれている以上に、漢字文化諸国を相互に接近させている」という基本視角は、これから二十一世紀にかけて、大きな歴史の意味をもつことになる。

著者  
レオン・ヴァンデルメールシュ

## アジア文化圏の時代

## 漢字文化諸国屹立の壮大な展望

東アジア経済圏の成長の展望に関して、著者は、「漢字文化諸国の発展活動力に対して唯一の反対例が存在している。それはベトナムである」と述べて、中国の発展の可能性を高く見ており、このあたりはフランス中国学界の大勢でもあるが、私とはかなり見方が違っている。

もとより私は本書から大いに啓発された。私代表となって本年度から始ま

だが、著者は、  
儒教的イデオロ

ギーへの回帰をアナクロニスティックに唱えるのでもなければ、誇大妄想的な文化圏的発想にとらわれているのでもない。著者は東京の日仏会館に三年間館長として在職した経験をもつ社会学者であるが、同時にアジア学の権威でもあり、本書はフランスの伝統的な中国学（sinologie）の粋を受け継ぎながら、その古い殻を破って東

つた文部省重点領域研究「東アジア比較研究」が儒教文化圏を対象にするというので、私の今春の訪仏に際して友人のフランス人学者が献本してくれたのが本書であった。それがもうこんな立派な邦訳となって刊行されたのだから、この点でも本書は印象深い。福鎌忠恕訳。（大修館書店・一、八〇〇円）

東京外国語大学教授

中嶋 嶺雄